

定期戦結団式 校長挨拶 要旨

みなさんこんにちは。

いよいよ定期戦がやってきました。

選手として試合に出場する皆さんだけでなく先生方を含め、学校全体で取り組むのが定期戦の醍醐味です。今年も勝利を収めて優勝旗と優勝カップを持ち帰り、引き続き校長室に飾れるよう皆さんの健闘を期待します。

私も為桜学園の生徒として3年、また教員として11年定期戦に参加していますが、卒業して何年経っても定期戦の思いでは消えることはありません。昨年定期戦70周年記念誌が発行されているので1年生の皆さんも是非読んで下さい。



今日は試合に臨む心構えについてお話ししたいと思います。

私は、勝敗は試合をする前にほぼ決まっていると思います。実力の差は一朝一夕に埋まるものではありません。陸上競技で言えば、持ちタイムがありますからタイムの良い選手が有利です。持ちタイムの遅い選手が勝つ見込みは少ないと言えます。だいたいの順位は走る前に決まっています。でも試合においては何が起こるかわかりません。私は選手として、監督として様々な大会で「まさか」という場面を見てきました。

私が、下妻一高の陸上競技部の顧問をしていた時のことです。県大会の最終種目・男子1600メートルリレー決勝に出場しました。（一人が400mを走ります。）各チームの持ちタイムと予選の結果から私たちは優勝を狙える位置にいました。選手達も私も当然優勝を目指していました。レースが始まり本校は第3走者まで実力通りに走りアンカーにバトンが渡ったときには先頭のすぐ後ろにつけていました。本校のアンカーには400mと800mで県の上位に入る力がありスピードと持久力がある選手を配していました。ここで一気に逆転して優勝という場면을想像しました。ところが第2コーナーを回ったところで本校のアンカーがいきなり立ち止まったのとバトンが地面で跳ねているのが見えました。先頭の選手を追い抜こうとしたときお互いのバトンがぶつかってはじかれてしまったのです。短距離走では、一度緩んだスピードは取り戻すことができません。本校のアンカーがバトンを拾ったときには他の7チームに抜かれて7位のチームから20メートルほどの差が開きました。優勝どころか関東大会の出場権を得る6位に入ることも難しい状況です。絶望的な距離でした。しかし、今思い出しても鳥肌が立つのですが、バトンを落とした選手は諦めること無く猛烈なスピードで追い込みゴール手前で前を行く2チームを躲してほんの僅かな差をつけて6位でゴールテープを切りました。

もしバトンをとさなかったら（優勝していただろう）、もしバトンを落とした時点で選手に諦めの気持ちがおこったなら（関東にも行けなかった）どうなっていたでしょう。そ

こから私も指導者として様々なことを学びました。

先ほど勝負はやる前にほぼ決まっていると言いましたが、どんなに実力の差があろうともやはり試合はやってみなければわからないのです。自分が有利ならそれを確実にすること。不利ならいかにしてその差を埋めるか。準備を怠らないことが重要です。何があるかわからないから試合をするのです。相手は同じ高校生、しかも兄弟校の生徒です。油断や諦めは禁物です。定期戦には「魔物」が棲んでいると言われますが、その魔物を味方につけるか敵に回すかは皆さんの心構えや準備で変わってきます。4日の定期戦では試合に出る者も応援する者も全力で戦い、総合9連勝を達成しましょう。